

んと川田小一郎氏に謀り會社事業となし、運漕の便を圖らんと九十九商會なるもの組織したり、是れ後の三菱會社の原にして今の日本郵船會社の祖先なり、此より困苦勤勉し事業に勵み營業上にて得たる金數万圓を上納し、又更に船を買下けて私立の會社を立てり、此れ前記の三菱會社なり、夫より外國船と競争などし終に我國の航海權を握り岩崎家今日の富豪となりたるは彌太郎氏の勤勉の功と才知のなす所なり。

○成功の基

高橋徳次郎氏は大阪市西區京町堀通三丁目酒井宮吉氏の妻の甥に當れる人なり、曾て酒井氏が外國に航し大に成すことあらんと志を決したるが資金所が渡航の費にさへも乏しければ、日夜業に勉強し且儉約なして漸く五十圓の金を蓄へければ先づ高橋氏なりと渡航なさんと思ひ、明治

二十年四月高橋氏二十四歳の時旅費を與へて氏のみを印度地方より新嘉坡地方を航せしに、高橋氏は出發以來途中にて意外の旅費を支拂ひて彼地へ着したるときは僅か一圓二十錢の金を殘すのみなりしかば高橋氏は馴れぬ異國のこと殊に物價高き國にて如何にせんと途方に暮れ、此上は歸るに歸られず、便る所とはなければ餓死するの外なしと腕を拱き最とも萎れて居たりしが、何時まで此くなし居るべきにあらずと氣を取り直したるが、偶と思ひ付きしは人間は食慾ほど強きものはあらず是は食物屋をはじめに如じと考へつきたれども、儲て何をなさんも勝手分らぬ土地のこと何をしてよきか知れざるに又もや腦をいため始めしが會て國に居たるとき外國通の人より聞きしに外人は食後に菓實又は酢の物を好むと言ふことなれば此の地に於て日本の酢しやを始めなば好からんと思ひ立ち名案なりと早速此の營營に着手したるに原料及び道具も内地

の如きものはなけれども只形ばかりの道具を整へ原料も彼地の魚類を以てし、米は割合に安すければ之を炊きて酢しを製し賣出せしに始めの兩三日は未だ人の知らぬことゝても多くも賣れざりしが、何地も同じく珍らしきを好むが人の情とて人々集り來り店先は人山を築きたり、買人は日々増し來り何時も品切れとなるにぞ明日の出来るを今日より豫約し歸る有様にして手も廻らざる程の盛大をなしたり、其内に在留の日本人を探し雇ふて手傳はせ盛んに酢を賣りたれば五六ヶ月を経ずして七百圓餘の大金を利したりければ高橋氏は餓死せんとまでに窮したりしことを思へば夢かとはかりに打ち喜び先づ酒井氏に知らせて喜ばせんと郵便に托して報じたり、翌二十一年三月に至り儲けたる金を携へて大阪に歸へり一伍一什を物語り且つ見込みし商品は何々なりと告げ、其品物を仕入れて其年の五月酒井氏と共に彼地に渡り一商店を開きたる此頃は尙我國より

開店したるもの少なく其上日本品の彼國の需用に適ふもの少なき爲め酒井氏の店は日々繁昌しく多くの手代を使用するに至りたれば随つて品も賣れ切れとなるより高橋氏は彼の地に止り酒井氏は歸朝して又々多くの品物を仕入れたたり、此時は二十二年八月にて前きには雜貨反物海産物に止まりしが此度は氏の人々が嗜好する品物を探りつけ、尙々賣品を多く仕入れ氏の姉なる千代子をも伴ひて渡り其後又仕入れに歸りたるとき妻をも携へ行き四人共に勉強しければ非常なる繁昌を來し其後度々仕入れに歸朝するに至りて多くの資産を蓄へたり、之れ高橋氏の窮して酢屋を始めしが基となりたるなり。

○感すべき卓見

西村勝三氏は下總國佐倉の藩士にして西村茂樹氏の實弟なり、氏は才智

あり且卓見家なり、氏早くより小祿の士となるより商業家となり大志を  
 立てんと希ふ之れ氏は時勢の變遷を知るなればなり、先づ横濱に  
 出で居留地九十番館の館主に就き能く外情に通じ夫より江戸に來り商店  
 を開きける時に明治元年の東征のことありて、官軍江戸に入らば江戸は  
 黒土地となるべしと人々安き心もなかりけるが、官軍既に箱根を越へし  
 と聞くや市中は如何になるやも計り知れざれば避けるに如かじと士民は  
 上を下へと騒動し老人子供を近國に立退せ、家は各々縮りして難を避け  
 音だもなき程にて、恰も火の消えたるが如し、爰に於て氏は獨り江戸に  
 止まり斯く人家に人なきに至りては官軍の江戸に入るも旅營に充つべき  
 宿なく、且諸用品に窮するならん、此れ即ち我が期し待ちし秋なりと近  
 在に行きて家具及其他の諸用品を求め人夫を雇ひ大八車に載せて運び來  
 り廣やかなる家を多く借り受け大看板に官軍旅館と黒々と大書し、其

戸口に懸け又用品をも陳列したるに官軍勢入り來るや、官軍は之を見受  
 けさても氣の利きたるものもかなど太く感じ、殊に稱揚し官軍は悉く  
 これに宿り用品等に一も便を欠くことなかりしかば上野の戦ひも畢り、  
 江戸は平穩となりて後ち當時の兵部省より金幣を賜ひて氏の功を賞され  
 且材幹あるを見給ひて御用達を命せられたり、其後官軍奥羽地方に向ひ  
 しかば氏は兵器彈藥の缺乏するを豫知し直に横濱に至り九十番館に赴き  
 館主に謀り數万の金を借り銃器彈藥を仕入れ御用納に充て置きたるに、  
 果して案に相違せず兵部省より多くの兵器彈藥を即納せよとの命令あり  
 しかば氏は直ちに此れを上納し御用を欠くることなかりしかば氏の機敏  
 なるには兵部省にても驚きしと言ふ、其後函館の戦争も平定し世は太平  
 に至りしかば今後は外國品の入用を見るならんと察し、靴其他洋服地等  
 を仕入れしかば果せるかな諸官省にて官吏が洋服靴を用ひることにな

り、注文及上納多きに至り遂に氏は巨萬の富を得しと其卓見實に驚くべし。

○虎兒を得る策

大阪の豪商阿部彦太郎氏は元近江に生る、大望を抱きて初めより空拳を振つて巨萬の富を得んと期したり、偶々奥羽の變亂に逢ふや氏は時期來れり、我が常に抱ける大業を成すは此時に至りとし、進んで奥羽地方に趣き彈丸雨と飛び煙硝雲の如き間を奔走し、拂ひ品を買へり、此時此地方は人民戦々惴々として狼狽し居ること、て明日も知れぬ危急に際し命に替ゆべきものはなりしと氏買はんと言ふに任せて皆賣り拂ひて金となし、之を懷中にして走らば命は助からんと氏が言ふ價にて賣り飛ばす、氏は意の如く望みを達しければ買ひ求めたる物品を東京及大阪に送り

徐かに賣却して莫大の利を得たり、初め氏が計畫をなす危きを知りつ、趣くを飛んで火に入る夏の虫と笑ひたるが、笑ひしものこそ却つて世を見るの力なきを笑はるゝに至るの富をなせるを羨むものあれば、氏は言ふ虎穴に入らずんば虎兒を得ずと宜なる哉

○此の敏捷

高島屋嘉兵衛氏は江戸三十間堀の人、天保三年に生る、父嘉兵衛氏は氏が幼少の時損失のみ續き身代を傾けしま、死没しなければ、氏は少年にして家を繼ぎたり、されど身代は衰へて負債は山をなせり、氏は之を回復せんとしたる折柄江戸大地震ありてそれより火を失し出入屋敷なる南部鍋島二藩の邸も焼ければ、曾て氏は建築の技に長ずるを知られ、同邸には直ちに築建御用掛を仰せ付られしが恰も父嘉兵衛氏が生存中に材木

賣買の約束をなし置きたるを以て氏は此處ぞと思ひ其材木を取り寄せ三十日間に鍋島邸を建築し終り、引續き南部邸の建築に取懸らんとして材木を取寄せ置きたるに不幸にも大風雨にて河水溢れ筏どしある材木を押し流されたり、これが爲め非常に損失を蒙りしも前志を罷さず更に材木を買ひ入れて其建築を終りしも負債は材木流失の爲め山をなし、償ふに由もなき程なりき、されど氏は屈する氣色なく横濱に商店を開き肥前の物産を賣捌きをなせり、然れども尋常の利益にては負債を償ふに足らざるを以て組合にて其當時嚴禁しある小判を外人に賣りて負債を償還したり、而して氏は國禁を犯したれども自首して佃島に呻吟したるが世は維新となり大赦により出獄して再び横濱に至り一小商店を開き高島屋と號し姓を高島と改め小商ひをなしける、面白からざれば刻苦艱難の末外國語に通せる書生を雇入れ外人に親み建築の請負をなしたき旨申入けるに

外人舉て之を注文するもの多し、幾許も經ずして數万圓を利したり、此地紙幣相場喰違ひにて一儲せんと機敏なる運動をして遂に身代の回復をなすことを得たり、氏は此他神奈川海面の埋立を請負などして富豪とはなれり。

○汁一つなくても飯はくへるこそ

||よろづ事足る始めなりけり||

水戸武公が、家を嗣げる始めての元旦に、新年を祝せんとて、七五三の膳を具へ既に汁椀の蓋を取つた所が、汁がなかつた、これを見て小姓頭は恐縮し、臺所掛りを始め、其の他役人一同どうして間違ぞと、何れも恐れ入る旨申上げた所、武公は奥へ入つて『汁一つなくても飯は喰へるなり、たらぬ物の始めにはして』と詠じて、笑ひながら、機嫌麗はし

く、終に何の咎もなかつた、そこで人々感じ入つて、從來を慎しむやう互に誓ひ合ふたと云ふことであります。所が此の事を紀州侯が聞き、其の態度に感服せられ、誠に「寛仁大度、御狂歌感吟に堪へず候」と手紙を送られ而して其の末に、

汁一つなくても飯はくへる

よろづ事足るはじめなりけり

と、一首の狂歌を添へられたといふ事でありませう。

●衆を刃に測ぎ奉公の義務を全くす

||上田主水衆嘲の裡に超然たり||

上田主水は重安といひ、人と爲り体軀が矮小でありましたが、其の性勇敢で、文武の道も人に勝れて居りました、所が關ヶ原の役に、石田三成

に屬して罪を獲髮を剃りて宗古と號し、後ち淺野幸長に身を寄せました所が幸長は其の武勇を知り、祿一万石を給して臣下とならしめました、時に宗古は茶事に達し、それにて一時名を高めて居りましたから、幸長が若山城を修理するや、群臣は皆出で、其の役を助け、宗古も亦出で、奔走しました所、衆人は宗古を見て嘲り笑ふて曰く我が亦大家である、一万石の茶坊主も置いて居らるゝと、幸長は之を聞き、主人を召して佩刀を與へていふやう、此の頃種々と卿を嘲ける者があると聞くが、決して之を胸中に置くな、國家一旦事のあつたならば、之を以て殊勳を立てよと、そこで主水は之を受け、拜謝していふやう、臣を嘲り笑ふ者は、固より小人で齒牙に掛くるに足りませぬ、何ぞ之を意に介しませう、然るに今公の此の言を蒙るは、如何にも過分の至りであります、されば苟も緩急のあつた場合には、臣は必ず血を此の刃に測いで、今日の恩恵に

報ひ、衆人も目を醒ませませうと、時に衆人之を聞きて曰く、茶坊主が何を云ふやら、所謂血を刃に濺ぐとは、鼠でなければ猫であらうと、かく嘲り笑ふて益々冷かに罵り、終に主人の顔を見て冷笑せぬものはないやうになりました、されど主水は平然として知らぬ者の如く、他人の罵りに任せて居りました、所がやがて大阪の役起り、豊臣、徳川最後の大会戦を知るや、幸長の長子長晟には、主人を従へ、和泉に出陣しました其時大阪にては、紀伊人を誘ひ、虚に乗じて兵を起し、之を狭み撃ちにせんとしましたから、長晟は兵を分ち、返りて之を救ひ、榎井といふ所に泊りました、其時大野治房が兵一万五千を率ひて、長晟を追ひ貝塚に來つて榎井に泊らんとし、塙直之を先鋒として攻め來りました、その時主水には龜田高綱と共に殿をして居りましたから直に陣頭に現はれ、塙直之と渡り合ひ、互に屈せずして戦闘し、双方創を負ふて退きましたが、

時しも長晟之を聞き騎を返して赴き援けましたから、主水は復び、創を裏んで高綱と共に馳せ向ひ敵と戦ひて、終に之を破り、直之を始め、淡輪重政、岡部則綱の敵將を斃し、其の死級を提げて、之を長晟の麾下に献上しました、その時長晟は之を見て、其の抜群の功を賞しましたが、そこで主水は始めて衆人に向ひ、公等は嚮きに我を嘲りて茶坊主といひましたが、今ぞ茶坊主の一番槍を御覽になつたのでありませうといつたので衆皆默然として、一言も發する者がなかつたといひます。

○時計商の一小僧より蹶起したる蒸氣機關の發明家シエームス、ワットの修養半面

(1) 天才は迫害の子にして不運の友なり

|| 交通運輸の大偉勳者 ||

蒸氣機關の發明家として交通運輸並に製造工業の上に多大の功勳ある一人物は千七百三十六年、即ち今より百七十餘年前を以て英國の一小都會に生れた、其の家は極めて貧しく、其の身亦羸弱なりしに立志研學身を養ひ行を謹みたる効驗著しく、此の如く人類の幸福に偉勳を建て、其の名を後世に輝かしたるのみならず、富も巨萬を累ね、壽八十三の高齡を保ちて勝利の光に送られつゝ、永眠せる、又以て人生の榮譽なりといふべきである、其人を誰れとかなす、いふまでもなくジエームス、ワット氏である。

(2) 着眼の警拔は發明的資性を語る

彼れは天來の發明的資性を有せしが六歳の頃から既に機械に對する趣味を抱き時に白墨を弄びて板又は壁などに線を書き器具の形容を記し、或

は玩具を分解して又之を組立つるを以て樂しみとしたのである。

彼れの遊戯といふに戶外にて小兒等と驅狂ふにあらず此の如き群集的遊戯は餘り好まず多くは室内に在りて工夫を凝すを常とした、父母亦之を異とし、父は數學を授け母は文字を授けて鐘愛したりしが、ワットの十四才の時之をグラスゴ市の一知人の許に託して教育することゝなつた彼れは慧敏にして能く事物の理を曉り、其の研究的天才は益々熟し來るものゝ如く、茶釜の蓋が蒸氣のために吹き上げらるゝを見て幾度か蓋を開閉して其の奇なるを試みしが如きは、常人の見て以て尋常の事となす現象にも着眼の警拔なるを思ふべし。

(3) 蒼穹高くして達すべからず

|| 星辰燦として光を放つ ||

此奇童は歳十五にして電氣機械を作り、起重機ポンプ並に其の他日用家



具を製造して人々をして驚かしめた、彼れは博物又は天文書の外讀むことを好まず、或日彼れは珍らしくも室内にあらず、朋友等はジエームス何處に在ると探し歩きたるに何事を彼れは郊外の大地に仰臥して巨眼を開いて、天上を眺め入つて居つた。

「ワット君足下何をか爲す、何處にか善き器械を發見せしか」

「否な、余は天文書を讀みて宇宙の現象不可思議にて堪らず故に仰いで天を眺むるのみ、蒼穹高くして達すべからず、星辰燦として光を放つ、或者は動き或る者は停まる、古往今來、千年万年嘗つて其の軌を違へることなし、豈不可思議の極に非ずや、余は幾んど其の玄妙に撃たれ、何を以て説明し得べるかを知らず」

(4) 堅忍不拔、身体弱きも精神強し

と依然として天を仰いで歸らんともしない。

然れども貧しき父母は何時までか彼れを養ふ能はず、ワット歳十八彼れは獨立自活の法を立てなくてはならぬ、此の將來の大發明家は大頭腦の萌芽を携へて飄然倫敦に至る。

|| 曉夢猶濃かなる時獨り孜々として勞働す ||

彼れは日々諸方を奔走して職業を求めたり、然れども其の名の未だ聞ゆるなく、其の技術の未だ言ふに足るものなし、彼れは到處に拒絶せられたれば遂に已むを得ず一時計商に奉公して一時の窮迫を彌縫すること、なつた、此奉公は見習奉公の如きものにて、無給の上に二十磅の年謝金を支拂はなければならぬ、ワット素と資力なければ、自力を以て之を償はなくてはならぬ彼れは朝早く起き各家未だ戸を開かず曉夢猶濃かなる時、獨り孜々として勞働に従事し、一週八志の賃銀を得て苦學した、然れども彼れは元來健康の人にあらず、早朝より夜陰に至る勞働と飢餓屢々

至れるために甚しく身体を害し、殆んど境遇に堪へ難くなつた、身体弱  
きも精神は強く、彼れは一日一食の事ありしも堅忍不拔、時計の技術を  
研究し今や得る所頗る多く以て一商店を開くに足る技倆となつた。

(5) 大海に浮木を得たる如き一教授の同情

|| 自家獨特の天才を發揮せしむ ||

彼れは貧の境遇に苦しめられて而も之に打克てり、此の勝利の餘威を以  
て更に第二の艱難に全勝を占めなくてはならぬ、グラスゴーは彼れの目  
的地として撰まれた、案の如く障害は盛んに其の身邊を襲へり、グラス  
ゴー市にては同業者の他より新來するを好まず、相盟つて商店を貸さし  
めず、極力之を妨げたれば、此大發明家も多數の團結力には敵し難  
く手を束ねて施す所を知らなかつた。

偶々グラスゴー大學の一教授はワットの境遇に同情を表し學校の一室を

貸與したれば、彼れは大海に浮木を得たる喜びして補助の一小童と共に  
此處に往し、いよく時計製造の開業をなしたるが、世人未だ昆山の玉  
を認めず、彼れの得る所一週僅かに二磅に過ぎずして收支償はず、依つ  
て時計專業にては自立覺束なきを知り、副業として樂器を商ひたるに、  
一日或る顧客の依頼に應じオルガンの修繕を試み、自家獨特の天才を以  
て之に應用したれば其の仕上凡を抜き斯道の達人をして舌を捲かした  
といふ、偉人の艱難を一の學校として觀念し、進んで問題を解釋せんこ  
とを勉む、一個樂器の修繕は、ワット後年の大發明に比すれば一瑣事た  
るに過ぎざれども、彼れの之に依つて學び得たる知識と經驗の重大なる  
は又勿論言ふに及ばざる處である。

(6) 機を捉ふるに敏なるものは寸毫だも空しくせず

|| 天の人を生ずる誠に故なきにあらず ||

茲に記憶すべきはグラスゴー市の時計商に迫害せられて、大學教授の義  
侠心に依り大學の一室を借受けたることは、偶々以て其生涯に離るべか  
らざる關係を生ぜること是なり、蓋し天の人を生ずる誠に此の如きもの  
か。

ワットは大學の一室に住居せるが故に、多くの大學教授と交り結び理  
學上の智見を弘むる機會を得た、後年其の大發明に係る蒸氣機關の學理  
に就いては、常に有益なる談話を聞くを得たのである、機會を捉ふるに  
敏なるものは一本の葉と雖も空しく逸するものにあらず、彼れは此の天  
與の機會を利用して職業の傍らますます研究を積みけるが、抑も蒸氣利  
用の事たる此時に始まりしに非ず、遠く千七百年の昔希臘の醫家ヒロな  
る人に依りて試みられたることあり、ワットの未だ名を成さざる時に於  
ても既に二三の蒸氣機關あり、就中ニューコメン式に至ては最も好評あり

るものであつたが、構造猶不完全にして改良を要すべき餘地甚だ多かつ  
たのである、之に加ふるに人文の發達漸く盛んにして、各種の生産業は  
勿論、運輸交通ともに機械力應用の時代は潮の月と共に生ずるが如く  
徐々高ます來りたれば、蒸氣機關の改良進歩は當に時勢の要求する所で  
あつた、ワットは此る時代に生れて此る天才を有して居つた、此の人に  
して研究宜しきを得ば必ずや世界人類のために偉功を建つべき運命を有  
したのである、而して彼れは之れが研究に極めて適當なる場所たる大學  
に身を寄せました、彼れが蒸氣の應用に對し心甚だ動き、歩を進むること  
一躍二躍今や日々之が工夫に専心する誠に偶然ではない。

(7) 一難二難波の如く來りて針路轉た艱む

|| 寢食を廢したる研究水泡に歸す ||

大望は人をして如何なる艱難にも堪へしむ、彼れは先づ硝石壘を以て蒸

汽を貯蓄し、中空の木片を以て蒸氣管に代用し具に試験を重ねた、或は黄銅の水銃を以て汽筒に代へ蒸氣力を計る等、幾多の研究を積みて蒸氣機關に關する原理を會得した。

彼れは研究に於て幾んど寢食を廢し、全く世時を忘れたるが、いよいよ其の雛形を作らんとため、一の古き鍛冶工場を借り一人の助手を隨へて孜孜製作に従事した、然れども彼れや固より一介の貧しき時計修繕業者である此る大事業に費すべき資金のあらばこそ、剩へ助手は中途に死去したれば、一難二難波の如く折重なりて針路轉た艱む、そのみなればまだしもなれど、萬苦の後成功したる機關には不完全なる所多く、蒸氣漏脱して實用に供する能はず、竟に失敗に終りたれば彼れの身に取りては多大の費用も水泡に歸し、負債山の如く債鬼俄に門に滿つ、而も債鬼或は拂ふべきも尙此後發明の事業は繼續すべき資金を得る途なきは如何、

これワットに取りては難中の難と云はなくてはならぬ。

(8) 空しく其の經綸を胸底に藏して天時を待つ

富者の助を得んとするも、彼等はワットの失敗に懲りて手を出さんともせず、ワットの遊説は日に徒勞に過ぎず、空しく其の經綸を胸中に藏めて天時の速に到來せんことを待つのみ、此の時や彼れは第一の失敗のため家資を傾けたれば、時計樂器業は己むなく廢業し、今や一金の收入だもあらず、家族は餓死に瀕するの慘狀を呈した、さすがのワット先生も失望せずには居られず。

『凡そ世に發明家程馬鹿らしきものは無し』  
と嘆じたことがある、當時彼れの心中並に生活の狀態畧ぼ想察するに足る、此る憐むべき境遇の人をして、其の儘埋没に附するならば天道の是

非疑なきを得ないと雖も、天の人を作らんとす必ず先づ之つを鍛練す、ワットは今や此の熱火中に在りて鍛練せらるゝ絶頂時である、此の鍛練に心鈍りて大望を一擲し去るか否かは彼れの生涯にとりて重大なる關鍵であつた。

(9) 再度の製作其の收むる所如何

|| 水に渴せる禾穀の潤雨を得たるが如し ||

資金を得ずんば生命断ゆ、彼れの要求するものは、今や空気がよりも水よりも、先づ資金の援兵である、幸にして義侠なる一人ロイバツク氏ありワットのために財債を辨償し、其の製作を幫助せんこと約したるより水に渴せる禾穀の潤雨を得たるが如く、ワット頓に氣力を恢復し、長き忍耐の後其の特許権を得て機關の構造に着手した、日を費す事六ヶ月資を投すること亦少なからずして工漸く成れば何んぞ圖らん蒸溜漏出して先

回の如く用をなさず茲に於て第二の失敗を招くに至つた、遺恨何ぞ堪えんや、此上は施す術なし、依つて己むを得ず暫らく發明事業を廢し、測量所に職を求めて一家を支へ、徐々第三の試験をなすべく研究に一心を傾けた。

(10) 道何ぞ彼れの爲めに獨り嶮岨なる

ワット此時其の苦衷を語つて曰く「余今、三十五才、而も未だ何等の功業を成す能はず年齢に對して心深く耻づ」と彼れは營業を思ひ大望挫け而して僅に身を一介の測量師に委ねて人生の行路を攀づ、道何ぞ彼れのために獨り嶮岨なる、測量師と云へば身を山野に暴し、雨路に打たれ、懸崖絶谷の厭ひなく跋涉せざるべからず彼れや素と健康ならず、加ふるに二回の試験と其の失敗に依りて身を傷ひしこと常ならざる後なれば幾

二一四  
んど其の勞に耐へず、辭せんか糊口の途なきを奈何せん、留らんか病を發するに至らん、二者何れも杜塞するに當り、偶々賢き内助役として艱苦を俱したる、愛妻マガレットの幼兒を遺して死去の哀みに逢ふ、人生の慘何ぞ一に此に至るや、意思剛邁のワットもために腸九廻の感なきを得ないのである。

(11)

窮冬の陰は去り和風駘蕩の春來る

|| 彼れの頭上身邊は幾層倍の光華を以て飾る  
然れども窮冬の陰は今やワットの頭上を過ぎ去らんとし、熙々たる春光は漸くにして其の身邊を照し來らんとす、バーミンガム市の時計商ポルトンなる人、ワットのために力を盡さんことを約し其の大工場に於て機關を製造したるに、成績は前二回の失敗に反し極めて良好であつたからワットに約するに事成らば利益の三分の一を分配することとした、宿願

二一五  
今やはれんとす、ワットの喜や知るべきであるポルトンは此の良成績に鑑みて、更に數個の排水機關を作り鑛山に用ひしに其の効果顯著にして人力を省く大なるを證明したれば『ワット式蒸汽機關』の名は忽ち國內に傳播され好評噴々人皆相争ふて之を見んことを欲するに至つた。ワットの勝利ワットの凱歌は幾倍の光華を添へて彼れの頭上身邊を掩ふた。雷に其名聲の國內に轟けるのみならず、早くも海外の視聽を驚かし、時恰も銳意改進に勉めつ、ある露國政府は年俸一千磅を以てワットを聘せんことを申込んだ、然れ共彼れは時計商ポルトンの義氣に依り、氷霜の下より救はれたる高誼を思ひ厚俸も其志を奪ふ能はず、斷然露國の聘禮を謝絶し一意天職に盡した、此の後と雖も多少の困難、失望伴はざるに非ずと雖も其行路は概して平坦にして又舊日の峻山激流あらず、遂に世界の文物を變革するにはナポレオンの大能力も多く及ばざる大功業家と

なつた、是れ全く熱火中に鍛練せられたる結果に外ならずして、ワット  
の専門よりいへば狭き釜中に沸騰蘊蓄したる蒸汽力の應て迸發して萬の  
原動力となつたのである。

◎聖賢の言行と片傳

|| 釋迦心理の奮闘 ||

人物の大小を鑑識するに二箇の標準がある、一は其の感化の廣狭長短に  
して、他は其の境遇と行實との關係である、境遇に動かされて何等自由  
の行動なく、之れを大ならしむるも境遇の力で、其の人の力ではない、  
たとひ其の行蹟の傳ふるに足るものなしと雖ども、能く境遇を制して自  
家立脚の境地を拓きたらんは又以て大となすに足るものがある。

|| 釋尊の境遇 ||

釋尊は中印度迦毘羅城卒都の城主ストダサの子である、幼にして穎悟、  
父其の出家を憂へて三時の宮殿を造つて、春は花咲く庭の面、夏は涼し  
き瑠璃の宮、冬となれば金殿玉樓の樂み、人生亦何の不安なく缺陷なき  
の家庭に長じて、五天竺に隠れない美人耶輸陀羅を妃とし、三千の宮女  
之れに従つて翠帳紅閨の中、誰か出で、山林孤獨の生を望まんやである  
しかも釋尊は此の歡樂の中に在つて出離の志禁じ難く、求道の心止み難  
くして、終に四海に等しい富を棄て、萬民の主たる國王の位を棄て美し  
き妻を棄て、愛らしき子を棄て、三衣一鉢の乞食生活に入りしもの、其  
の志の堅くして毫も境遇の左右する所となりたまはざりしを證するので  
ある、其の父王並に王妃離別の苦を訴へて歸城を勸むるものあるや、嚴  
然として、

我は一時の離別の苦を濟はんより永世の離別の苦を斷たんと欲するな

り  
とて、歸りたまはず、王舎城を過ぎたまふの時、國王頻婆沙羅が、若し  
王たらんと欲したまは、國を擧げて之れに臣事せんといへるに對しても  
我が志は生老病死の四苦を斷じて無上解脱を得るにあり、豈に世間の  
五慾の爲めに家を出でんや、王よ、希くば正法を以て汝が國を治め、  
民庶を虐ぐるなかれ。

といひ袂を拂つて自ら苦行の人となりたまひし如きは、これ豈に薄志弱  
行の徒の企及し得べきことならんやである。

古來の英雄多く身を貧賤の境に起す、貧賤より起る事頗る難きが如しと  
するも、現下の不如意は能く人をして奮勵の念を起させ、又他に我を誘  
惑するものもないのである、今釋尊、身は誘惑多き高貴の家に生れて、  
障碍多き家庭の中に成長して、能く此の境遇に制せらるゝことなくして

志す所を行ふ、其の意志の強固なる以て人格の大なるを見ることが出  
來るであらふ、昨は綾羅錦繡を纏ひし紅顔の美少年、今は顔色憔悴形容  
枯骨の乞食僧となりて苦行怠ることなく、其の去つて佛陀迦耶に趣き菩  
提樹下に靜坐したまふ時の如き心理の奮闘、實に言語に絶したるもの  
あるのである。

|| 降魔の相 ||

此の端坐默念の間には、諸種の煩惱妄想は勢ひを逞して釋尊の心中に  
跳梁して、其の靜思を妨げ、學道を傷けんとした、其の狀は恰も百千  
億万量の惡魔、或は猛獅の如く、或は猛虎の如く、或は鼓を鳴らし、  
或は劍を執りて轉退せしめんとしたが、釋尊は寂然として動きたまはず、  
魔王はますます怒りて大疾風を起して大石を飛ばし、大雨を降し  
雷霆を轟かして之を脅やかしたれど少しも動じたまはず、心内拔扞す



る凡百の魔障を相手として幾多の健闘を續けたまひ、却て魔軍をして大に怯ましめられた、しかし思ふ所を達せでは止まぬ魔王は更に欲染悦人、可愛の三魔女をして各々、美装を凝らして惑はしめんとして耶輸陀羅の婆に似せて秋波一盼、艶言喃喃として力を盡したが、釋尊は一顧だも與へたまはず、獨り静觀を續けたまひしに、衆魔も今はかなはじと、其の影を隠し、臘月八日の曉星天に閃くの時、蓮華の花の開くが如く豁然として、こゝに無上正等覺を成じたまひ、三界はこれ我が有なり、其の中の衆生は皆な我が子なりと覺知して終に求道の目的を達せられました。

これを釋尊の降魔とす、魔とは心内の煩惱なり、塵勞拂ひ盡くして性天日月朗かに、妄想其の影を隠くして心海自波ら静。爾來、横説堅説五十年、席煖かなるに暇あらず、東西に遊行し、南北に

巡化し、機に隨て法を説き、病に應じて藥を與へ、或は高遠の哲理を示して時の學者を服し、或は卑近の譬喩を設けて無智の徒を化し、慈心懇切、渴仰せざるものなし、左に四五の金言を擧げて其の一斑を髮髻せしめやう。

|| 釋尊の金言 ||

○ 惡は心より生じて反つて自ら其の身を賊ふ、鐵の垢を生じて自ら其形を消毀するが如し。

○ 水滴微なりと雖も、漸く大器に盈つべし、大惡素より大ならず、小積より成る、小を輕んずるなくんば駛なきに至らん、水滴微なりと雖も、漸く大器に盈つべし、大福素より大ならず、纖々より積む、小善を輕んずるなくんば無量の福を得ん。

○悪を行すれば悪を得る事、苦種を種うるが如く、善を習へば善を得ること、又甜種を種うるが如し、悪は自ら罪を受け、善は自ら福を受く各自ら熟して他に之れに代るものならず。

○屋を蔽ふに蜜ならざれば雨なれば則ち漏る、攝意を行せざれば淫佚忽ち穿ち至る。

○欲の網を以て自ら蔽ひ、愛の蓋を以て自ら覆ひ、自ら我が身を獄に縛するは魚の網に入るが如し。

○愚者と雖も自ら其の愚を知らば遂に善慧を得るに至るべし、愚人にし

て自ら智と稱せば、之れを愚中の甚だしきものとす。

○十千の敵に對し一夫にして之れに勝つともまた自らに勝ち忍ぶの上なるに若かず。

○怨は怨を以て終に息むことを得べからず唯忍のみ、能く怨を息む、之を如來の法と名く。

以上は主として法句經によりて抄出せるものにして眞に九牛の一毛に過ぎずと雖も一句能く人の肺腑に浸徹するものあり、其の訓話に至つては叮嚀懇切能く無智の儕輩を訓化するのである、要と摘んで其の二三を語るに、

昔、長者あり新に婦を迎へ互に愛敬しぬ、夫、一日婦に命じて厨の中

に入り酒を取り來らしむ、婦往て甕を開き、自ら我が影の甕中にある  
を見て更に女人ありと思ひ、大に悲りて、夫に語りて卿先きに婦を娶  
りて此の甕中に藏し、復た我れを迎ふ、何ぞ無情なると、夫、爲めに  
厨に入りて甕を開き、又己が影を見て却りて妻を悲り、其の男子を藏  
せるを疑ひ、互に其の見る所を實として相争ふて止まず、一梵士あり  
其の争ひを聞き往て之れを視て又我が姿を見、長者が他の梵士を藏し  
偽り争ふて我れを試みるものとし恨み去りぬ、又一比丘尼あり、又往  
て其所由を質し、甕を開きて他の比丘尼あるを見て悲り去る、須臾に  
して道人あり、又往いて之れを見て其の影に過ぎざるを知り、喟然と  
して嘆ずらく、世人愚惑の甚だしき何ぞ此に至ると、夫婦を喚びて曰  
く、我が汝等の爲めに甕の中の人を出さんと、一大石を執りて甕を壊  
り其の實にあるなきを示しぬ、佛はこれを以て喻したまへり、三界の

人、皆な假身を知らずして實に我ありとして貪慾瞋恚  
き、日夜惡業を造り流轉の生死絶えざるは恰も是の如し。

(難譬譬經)

|| 人生の苦惱 ||

好喻能く人をして得入する所あらしむ、其の人生の苦惱を形容して、  
佛、波斯匿大王に告げたまはく、此に人あり、曠野に於て惡象の逐ふ  
所となり、怖れ去れども依るべきものなし、偶々一の空井あり、傍に  
樹根あるを見、根を尋ねて下り身を井中に潜む、時に黑白の二鼠あり  
互に樹根を噛み、又井の四邊より四の毒蛇ありて其の人を螫さんとし  
下には毒龍あり口を開きて呑まんとす、心に龍蛇を恐れ、又樹の断え  
んとするを恐るれども、奈何ともすべきやふなし、更に樹根に蜂窠あ  
り、搖樹ぎて蜂散じ、下りて此の人を螫し、野火は來りて此の樹を燒

く、唯だ蜂に窠あり日に五滴を人の口中に落す、此の人蜜を得て憂怖  
 苦惱を忘れ、其の心中五滴の蜜あるのみ、大王よ、此の人の少味を貧  
 りて此の苦惱を忘る、は憐れむべきにあらずや、大王よ、此の人はこ  
 れ餘人にあらず、衆生の世樂に貪著して大なる患を思はざるに喩へた  
 るなり、曠野は無明長夜の曠遠なるに喩ふ、象は無常なり、井は生死  
 なり、嶮岸の樹の根は命なり、この鼠は晝夜なり樹の根を噛むは念と  
 す生滅なり、四毒蛇は地水火風の四大なり、蜂は邪念なり、火は老病  
 なり、五滴の蜜は色、聲、香、味、觸の五欲なり。  
 毒龍は死に喩ふ。  
 (譬喩經)  
 といへるは、高遠の哲理を詩人も及ばざる想像を以て示せるものであら  
 う、其の、  
 昔、人あり、友の家に至り其の米を掲げるを見て密かに偷んでこれを

含み友の出で來りて共に語らんとするに當り、米の口中に滿つるが故  
 に之れに答ふる能はず、されど友に羞ぢ嘔みて吐かず、友、怪んで手  
 を以て之れを摸し其の口腫れたりとし醫を招きて之れを治せしむ、醫  
 曰くこの病最も重し、刀を以て決するに非ずんば治すべからずと、刀  
 を執て其の口を決破す、米口中より出で、其の事露はれぬ、世の人々  
 亦此の如し、諸の悪作を爲し、之れを覆うて敢て懺悔せず、之れを覆  
 はんとして却つて他の悪を作る三塗に沈む。  
 昔、獼猴あり、一把の豆を持て誤りて其の一粒を落す、乃ち手中の豆  
 を捨て、其の一を求めんとし、未だ之れを得ざるに先きに捨てし所の  
 もの悉く鷄鴨の食ふ所となれりと、凡夫も亦此の如し、一戒を毀りて  
 悔ゆる能はず、悔いざるを以ての故に放逸滋蔓し却て一切の戒を捨つ  
 の如きの數枚擧に違あらず。

釋尊の入滅

釋尊は實に此の如くにし、法を説きたまひ、終生倦むなく、八十の高齡を以て、尼連禪河の畔、娑羅双樹の陰に寂然として逝きたまひぬ、其の最後に當りても諄々教へて止まず、遺弟を戒めて、

汝等比丘、常に一心に出道を勤求すべし、一切世間動不動の法は皆これ敗壞不安の相なり、汝等、且く語ることを止めよ、時將さに過ぎんとす、我滅度せんとなす、是れ我が最後の教誨とする所なり。

と眞にこれ大河の緩流して海に入るの概がある、時に西曆紀元前四百七十九年二月十五日夜半、釋尊、涅槃の雲に隠れたまひて三千年、遺法遠く今日に傳はりて信徒五億萬、龐然たる宇内の大宗教である。其感化の長くして其の教域の廣き、以て其の人格の大なるを知るに足るであらう一代の言行は悉く吾等が修養の活模範にして八萬四千の法門五千七百の

經卷は、皆なこれ吾等が修養の好資料である、蓋し佛教は普く人心の三方面に亘つて哲學的には轉迷開悟の道を説く、宇宙と人生とを達觀して其の理を求めしめ、宗教的には離苦得樂を示して現實の苦を脱して理想の樂境に安置せしめんとし、倫理的には止惡修善の法を教へて躬行實踐せしめ、信仰と理解と實行とによりて釋迦の證入したると同一状態に入らしめんとするもので、釋迦一代の教化は之れを開示悟入せしむるにあつたのであるから、何れの点も皆な以て吾等を啓發し督勵するにあるのであるから、到底之れを此に示すことの難ければ畧すことにする。

道理と本心との命令を行ひ遂ぐるは剛勇なり

大石良雄天命を知つて死期を怖れず

大石良雄は亡君淺野長矩の仇たる吉良美史を討ちて後、肥後細川侯の江戸藩邸に御預けとなりましたが、其の時茶坊主二人附添うて、諸種の用を便じて居りました所が愈々明日は切腹と極つた前夜、良雄の廁に行きしを送りながら、一人は手燭を持ち、一人は湯を取りて之に従ひ、互に落涙しました、その時良雄は之を見て、何故泣かる、かと尋ねました、そこで二人は答へていふやう、吾等は此の程より御傍にあつて、御懇意を受けましたが、早や明日に御別れになる事かと、御名残惜くて覺へず泣きました、其の時良雄は顔色をも變へず、二人を見ていふやう、これは自分の覺悟にもなるべきことを能く知らせ下さつた、さて久しき間御苦勞に預り吾等も名残惜しく思ふ、何ぞ御身に參らせたいと思ふが、持參りし物が無い、之は持古したものであるけれども、納めて下さいとい

つて、一人には紙入の袋、一人には腰下げの巾着を與へたといひます。今に二人の家に寶として傳はつて居るといひます。

○父母を思ふは眞性の發露なり

|| 王陽明一喝して禪僧を蹶起せしむ ||

明の大儒王陽明が、一日虎踞泉に遊んだとき、其處に一人の禪僧が居て三年間坐禪をなし、口に物を言はず、終日眼を閉じて、物も見ないのを見ました、そこで陽明大喝して、和尚は終日物をま言はず見ずとは何のためであるかという、僧は起ちて禮拜をなし小僧、言はず見ざる事三年、私の言ふを得ざる所を俗人の貴君が代つて言はれるが、それは何の説であるかと、そこで陽明先づ問ふていふ、汝は何處の人か、家を離

二二二  
 れて幾年になるかと、僧曰く、某は河南の者、家を離れて、十余年にな  
 ると、陽明曰く、然らば汝の家に親戚は幾人居るか、僧曰く只だ老母が  
 一人あるが、其の存亡は分らぬ、陽明曰く、汝は母の事は思はぬか、僧  
 曰く、思ひます、陽明曰く、汝既に母を思はずに居ることは出来ぬのに  
 徒に口を閉ぢても、心中には其の事をいふて居る、眼は閉ぢても心では  
 着看して居るではないか、蓋し父母を思ふは天性であるから、どうして  
 之を斷滅することが出来やうぞ、一體父母を思ふのは、眞性の發露であ  
 るから、終日呆然として坐つて居つた所で、何の得る所なく、只だ心を  
 勞するのみである、俗語にも父母はこれ靈山の佛といふではないか、父母  
 を敬はずして、何を敬ふのかと、かく示したので、僧は覺えず大聲を放  
 つて泣き出し能く説いて下されたと感謝し、翌日早々坐禪を止め、行李

を纏めて郷里へ還つたといふことであります、それを陽明が後に聞き、  
 人の本性の善なることは、此の僧に於て見ることが出来るといつたとの  
 事であります。

一人の  
**出世競争** (終)

昭和五年三月廿五日印刷  
昭和五年四月一日發行

著作  
所權  
有作

編輯者兼  
發行者

印刷者

印刷所

發行所

一人の出世競争

定價八十錢

特價五十錢

茂山清太郎

東京市神田區三崎町三ノ七一

百目木智璉

東京市神田區三崎町三ノ七一

株式會社 榮舍

東京市神田區三崎町三ノ一七四

日本青年社

發賣所

東京市神田區三崎町三丁目  
大興社

振替口座東京  
五三六八九番  
電話九段一五六七番



終

